

第4回 被災地に学ぶ会

「被災地という場をお借りして

人としての生き方を学ぶ会」

活動報告



石巻市立鹿妻小学校・鮎川（牡鹿半島）

2011.9.22－9.25

【第4回 被災地に学ぶ会 行程表】

9月22日(木)	18:30	JR尼崎駅 南側バスロータリー 受付
		※満席の為、必要なもの以外の荷物はバストラックへ入れてください。
	19:00	バス発車 → 自己紹介
	20:30	滋賀県多賀SA(20分休憩) = 滋賀(2名)・京都(1名)・福井(1名)合流
		※途中約2時間～3時間おきにトイレ休憩(各15分間)
		※バス内で活動報告(金大竜先生)+震災関係のDVD鑑賞
23日(金)	2:00	北陸道「栄PA」(新潟)にて長野県から(1名)合流
	8:30	石巻市立鹿妻小学校到着 → 牡鹿ボランティアセンターへ向けて出発
	9:30	牡鹿ボランティアセンター到着 → 活動開始
	15:00	牡鹿での活動終了
	15:30	バス出発
	16:30	大川小学校到着→ご冥福をお祈りする
	17:45	出発
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食
	19:30	出発
	20:00	鹿妻小学校到着
	21:00	消灯
	21:00	浅野さん(避難所リーダー)の講話
	22:30	就寝
24日(土)	6:00	起床 → 朝食は各自で
	7:30	牡鹿ボランティアセンターへ向けて出発
	8:30	牡鹿ボランティアセンター到着 → 活動開始
	15:00	活動終了
	15:30	バス出発
	16:30	鹿妻小学校にバス到着→ご挨拶・記念写真
	17:30	鹿妻小学校を出発
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食
	20:00	バス出発(帰路)
25日(日)	9:00	JR尼崎到着 解散

【鹿妻小学校での活動チーム 行程表】							
23日(金)	8:30	荷物を持って体育館へ→ミーティング(活動内容確認)					
	9:00	それぞれのチームに分かれて活動開始					
	12:00	昼食					
	13:00	午後の活動開始					
	16:00	活動終了					
	16:00	鹿妻小学校出発					
	16:30	大川小学校到着→ご冥福をお祈りする					
	17:45	出発					
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食					
	19:30	出発					
	20:00	鹿妻小学校到着					
	21:00	消灯					
	21:00	浅野さん(避難所リーダー)の講話					
	22:30	就寝					
24日(土)	7:30	校内の草抜き&清掃					
	8:00	それぞれのチームに分かれて活動開始					
	11:30	昼食					
	13:00	午後の活動開始					
	16:00	活動終了					
	16:30	鹿妻小学校にバス到着→ご挨拶・記念写真					
	17:30	鹿妻小学校を出発					
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食					
	20:00	バス出発(帰路)					
25日(日)	9:00	JR尼崎到着 解散					
参加人数	85		教師	25		10代	25
男性	75		一般	7		20代	37
女性	10		大学生	53		30代	6
						40代	9
						50代	5
						60代	3

第四回「被災地に学ぶ会」体験記

★★長野県40代 男性★★

第四回震災に学ぶ会に参加させていただきまして誠にありがとうございました。私は長野からの参加ということで、大阪からのバスに便乗させていただくことが可能なかの長く考えていました。そのような中、大谷先生の「心意気次第でどうのようにもなります」という力強い言葉に「家族の理解も得られ、自分がやりたいと願っているのであるのだから動く」と決断しました。また、鍵山先生の「やっつて後悔することと、やらないで後悔することでは大きな違いがあり、行動を起こさずにする後悔ほど後々大きく尾を引く後悔はありません」という考え方にも触れ、自分の体験から「同じことを繰り返してはいけない」という思いもありました。活動を終えた今の気持ちは「行かせて戴き本当に良かった」という一言に尽きます。

復興活動は参加者の年齢、立場に関係なく、純粹にボランティアに参加させていただこうと考えている方であれば、誰にも多くの感動があり、自分の中に眠っている感性を呼び起こせる機会であり、今後の自分の生き方に一つの道標を与えてくれる機会になるのではと感じています。復興とは「物の復興」ということだけでなく、人が忘

れがちな「心の復興」（考え方、感じ方）ということもあるのではないかと思います。

私は、教師という職業柄今回の活動では、目の前の与えられる活動に「心を込めて全勢力を尽くす」ということももうひとつ、「現地の先生方の思いに気持ちを馳せる」という二つのテーマがありました。今後仕事に活かせるように学ばせて戴こうと思っていました。

現地に向かうバスの中で、松原先生の活動報告会の様子は、今回の震災で感じたことを教師としてどのように生徒や周りの職員に伝えていくかという具体的な方法を教えて戴けた学びの場でありました。合唱「あすという日」「オワリはじまり」の大合唱でこれから始まる支援活動の気構えができました。

初日の活動は、牡鹿ボランティア活動センターの土砂の片づけ。泥まみれになりながら慣れない土囊の袋に土砂を詰める若い女性の逞しさ、大阪産業大学硬式野球部の部員の皆さんの「みなぎるガッツ」に自分の気持ちも引き出されて清々しい気持ちで作業を進めることができました。何と一日の仕事が半日で終わってしまう程のはかど具合でした。これには「人の力つてすごいな」という感動を覚えました。

しかしその直後昼食時に見た山の斜面の土砂崩れの跡が山のほんの一部分であることを知る

と、自然の中に生かされている自分達が本当に小さな存在でその一部の復興に、何人もの人力で何時間もかけてやっつと片づくという現実には、自然の恐ろしさを感じた瞬間でもありました。津波のことを考えるとその破壊力の凄まじさ、そして人間の無力さを改めて考えさせられました。

その日の夕方、大川小学校を訪問させて戴き、失われた幼い命に合掌し、やっつとご冥福をお祈りできました。失われた命に対して何も言葉がありません。ただただその無念さを思いながら手を合わせるだけです。

私が実際この大川小学校の地形を見て考えたことは、「北上川から津波が来ます」と言われた時、果たしてどこに子供を避難させるかということです。長い橋がありますが、子供達を連れてこの橋を渡る勇気を正直言って持ってません。裏山には土砂崩れを防ぐために作られたコンクリートの岩壁、そして原生林。小学生を連れて登ることはできません。

「それではどこに？」残念ながらこの訪問した時間内にその避難方法を私には見つけることができませんでした。悲しい現実でした。

夜は避難所ボランティアリーダーの浅野さんのお話を戴きました。避難所で被災者の方々の生活を守り作ってきたその苦労は計り知れないものがあったかと思えます。理解を示してくれる方ば

かりではないと思います。どちらかというとなれない集団生活で自由のきかないことに対する不満の声が多かったのではと推察致します。その中先頭に立たれて頑張ってこられた浅野さんの勇気と行動力に頭が下がりました。「人はどんな状況になっても変わらない」日常生活の中で心の持ち方や過ごし方がいかに大切かを教えて戴いた一言でした。

二日目はいよいよ浅野さんの「避難所をお借りした以前よりもきれいにして、子供の体育館としてお返しする」という夢実現の日です。これには士気が上がりました。この状況下で浅野さんの夢の私欲のない大きな志が自分の心の琴線に触れた思いでした。こと更燃えました。浅野さんの思いと「心ひとつに」です。ただただきれいにするのは、心強い応援として日本美しくする会の東京支部の方々も駆け付けて戴きました。

畳みの天日干し、床磨き、窓ふき何でも磨き上げる気持ちで取り組みました。

最後のお別れの挨拶の時の浅野さんの詰まる声と涙にこの活動の報酬を十分に戴いた思いがしました。大谷先生のかげ声と共に行われた感動の胸上げに思わず自分も涙しました。

また避難所の方々の温かな笑顔とお話しの中に入らせて戴きながら、本当に来て良かったという幸せを味わうこともできました。何物にも代え

られない貴重な体験と感動がここにはありました。

復興支援活動はこれで終わりでない。今後避難所から仮説に移られた方々との交流もそうです。自分のできることを見つけこれからも復興支援活動に参加させて戴きたいと思っています。

末筆ながら今回の学ぶ会の参加につきまして、大谷先生を始めとするスタッフの皆さん、高速バス運転士井上さん、安井さん、避難所リーダーの浅野さん避難所生活を送られています皆様、そして共に学ばせていただきました多くの参加者の皆さんの温かなご配慮やお気持ちに支えていただきながら支援活動をさせて戴きましたことに深くお礼申し上げます。ありがとうございます。

★京都府40代 女性★

今回ご縁をいただき、初めて被災地学ぶ会に参加させていただきました。京都の掃除に学ぶ会からの参加は私一人ということで、少し緊張して参りました。

約十四時間の移動後、最初の牡鹿町での活動は、台風十五号の被害による土砂崩れの復旧作業でした。女の私にどこまでできるかしら、と一瞬思いましたが、大谷先生の「とにかく丁寧。どんな仕事も喜んで。」を思い出して、粘調質の土砂を土嚢に詰めていきました。学生さんのパワー

も、とても力強かったです。

午後からはガソリンスタンドの瓦礫撤去をさせていただきました。ここも、津波の被害からようやく再開のめどが立ちかけた矢先に、台風の被害にあわれて途方にくれているとのことでした。皆さんの細かな気付きと動きで、泥が詰まった排水のところまで、丁寧に掃除ができました。スタンプの方は大層喜ばれ、澄んだ青空の下で、感謝の思いで一杯になりました。

また大川小学校では、今回の台風の影響もあるのか、周囲は水浸しでした。ここで起こった地獄のような出来事を想像しきれない自分に腹立たしさを感じながら、小学校を後にしました。

避難所の夜、浅野さんのお話で印象に残った事は、三月十日以前の状態に戻してお返ししたいという深く熱い思いの中、「正直、この立場からやると抜け出せるかと思うと、明日は待ちに待った日です。」とおっしゃられた言葉に、計り知れないご苦労をされてきた浅野さんの本音を感じました。また、我々が活動している日本を美しくする会との出逢いの流れをお聞きして、この会を誇りに思っている私達にとっては、この上ない喜びでした。

翌日の避難所大掃除も、雲ひとつない秋晴れでした。大量の畳を干して、叩いて、お約束していた方にお渡しする作業を野球部の学生さんと一

緒にさせていただきました。

午後からは、体育館の道具庫を徹底的にお掃除しました。さすが、すぐにリーダーとなり指示して下さる仲間がおられました。とことんやりきるお掃除が出来た後、道具庫にぼつんとお一人で歯ブラシを持ってガラスのガムテープ後をこすっておられる浅野さんがおられました。そのお姿は、震災から今までの思いを込めておられるような、神々しい雰囲気を感じました。声をかけると、「一緒にやりませんか。」とおっしゃられて、お話ししながら磨きました。その中で、「皆さんは年期的ものの埃を見つけても、迷うことなくすぐに掃除して下さる。何も言葉なくても通じ合い動いて下さる皆さんは、私にとって嬉しくて、ほっとできるんですよ。」と仰ったのが、心に残っています。

また、浅野さんと一緒に、皆さんの満面の笑顔で楽しんだ雑巾レース。最後に浅野さんを胴上げした時の光景。思わず涙ぐんだ私の肩に、そっと手を置いてくれたのは、避難所の方でした。「あなたが泣くと私まで泣いちゃうっちゃね。枯れるほど泣き尽くしちゃったけど、大丈夫っちゃね。」感無量でした。

最後に、大谷先生が、「それぞれが学ばせていただく陰で、ご迷惑を掛けている人がたくさんいる。そこを申し訳なく思う。」とおっしゃられた

言葉にハッとしました。そして、その気持ちをいつも胸に留めて、いきていきたいと思いました。皆様、ご一緒していただきまして、ありがとうございました。

★大阪府20代 女性★

私は今回が初めての参加でした。出発前の気持ちとして、不安はなかったです。ただ、「できる人ができるときにできることをする。最高やんか。」と言って知り合いの方に送りだしてもらったのにも関わらず、正直自分の中では六カ月も経ってから行くことに後ろめたさを感じていました。もちろん、やっと被災地で直接自分の手で何かできることの嬉しさもありました。その二つの気持ちが入り混じった状態で私はバスに乗りました。

失礼な話なのですが便教会の活動に参加したこともなく、どんなことをしているのかも知らなかった私はバスの中で時間が経つにつれて、「なんだかすごいところに来てしまった。」と思いました。そしてこの方々と一緒にこれから三泊四日過ごすと思うととても気持ちが高ぶりました。

鹿妻小学校に着き、初めて避難所として使われている体育館に入ったとき、私はどんな顔をして

入ればいいのか戸惑いました。しかし、段ボールの仕切り越しに避難所の方々がにっこり笑いかけて下さったことで、一気に顔の筋肉が弛みしました。思えばこの時から被災地の方にもらってばかりの二日間が始まっていました。そして何より、今までこの学ぶ会に参加されて鹿妻小学校で活動された方々の行いのおかげで温かく迎え入れてくださったのだと思うとこの時から感謝ばかりの四日間は始まっていました。

活動一日目、私は校庭の草抜きをしました。しばらくすると、この学校の子どもたちも草抜きを手伝いに来てくれました。普通に話をしているのを聞いてみると、たわいもない小学生の会話でも楽しそうにみんな笑っていたのですが、一人の女の子がぼそっと「なんか笑ってられる。」と言ったのが私の耳に入ってきました。毎日普通に生活していたらなかなか出ない言葉だと思えます。本当に笑えない時間を過ごしてきたんだなと胸が詰まったのと同時に、今その子が自然に笑うことができているという事実がすごく嬉しかったです。

この日の活動は終わり、大川小学校へ行きました。ニュースでは見ていましたが、まさか自分が訪れてご冥福をお祈りすることができるとは思いませんでした。バスを降りて歩いて行くと、そこにはただ夕方だからではない暗さと、ただ誰も

しやべっていないからではない静けさがあるように感じました。学校の前に着き、頭の中で子どもたちが元気に走り回っている様子を想像しても、津波が押し寄せてきたことを想像しても、それが全部今自分の目の前に広がっている場所であり起きていたこととしてどうしても結びつけることができませんでした。慰霊碑の方へ近づいていくと、亡くなった子どもたちや先生方に会ったこともない知りもしなかった私がいきなり現れて手を合わせるのには無責任なのではないかという今まで感じたことのない気持ちが出てきました。しかし慰霊碑の前に立つと、「愛する人のところへみんな帰ることが出来ますように。」とそれまでの迷いを忘れて、ただ祈ることができました。このような機会を与えて下さったことを本当に感謝しております。

夜は浅野さんの話を聞かせて頂くことができませんでした。メディアを通してではなく、実際に体験した方の目線で、声で、その人の目を見て聞くことが本当に大事なことだと思います。自分の目で見ても耳で聴いても感じたものしか信じない！なんて意志の固いことは言えませんが、今回の震災の報道などに関わらず、自分の目で見ても耳で聴いても感じたことに対してでないと、ああだこうだ文句や意見を言うてはいけないと思いました。

消灯後寝袋に入り、どれだけの人がどんな想い

で何日もこの天井を見ていたのだろうと思うと目が冴えてしまいました。

活動二日目、牡鹿半島で私はまず台風で浸水した納屋の片づけをしました。野球部の男の子たちもいる中、私は納屋の中で役に立てそうにないなと思い、外に出された物をまとめることにしました。次の日にまた運び易いようにという思いもあったのですが、出された物を見て、もし自分の部屋にあるものがこんな風に外に出ていたら悲しい気持ちになるだろうなと思えたからです。これも、行きのバスの中などで「ガレキは瓦礫じゃない。どれもその人にとつて思い出の詰まったものだから、丁寧に作業してください。」というお話を下さっていたからできたことだと思います。よく見るとご飯を炊く大きな釜がたくさんあったので、私は「あのお釜でご飯を炊かれましたか？」と聞きました。するとお母さんは「うちは家族が多かったからねえ。」とお話をして下さいました。ある人が「瓦礫は我歴。」と言っていたのですが、本当にそのとき実感しました。そのお家はとても短い時間で終わったのですが、帰り際「お体に気をつけて下さい。」と握手をしたときに、目に涙を浮かべながら「また会えたらいいね。」とおっしゃって下さいました。大したことをしていない私にこんな言葉を下さることが有り難く、また本当にしんどい思いをされたのだ

ろうなと思いました。

次に、先日の台風で流れてきて海沿いの道路を覆ってしまった土砂を除ける作業をしました。スコップで土のう袋に入れて運ぶという力作業だったので、足手まといになりたくない思いと男性陣に負けたくないという思いもあり、張りきってやりました。するとその日の夜に、同じ班だった先生にスコップ捌きを褒めて頂けてとても嬉しかったです。途中から埼玉県からのボランティアグループの方が二十名ほど合流して、一気に作業がはかどりました。道路が見えたときは、やっただけと思いましたが、ただ、その人数をもつてもこの小さな範囲にこれだけの時間がかかるということで、改めて人手の必要性を感じた作業でもあります。二十五日に仮設住宅に引っ越す方も、家から家具を運ぶのを手伝ってくれる人が見つからないと言っておられて、まだまだやることはあるのに帰らなければならないことにもどかしさを感じました。

今回の三泊四日で私はたくさんの人と握手をしました。被災地の方はもちろん、先生方もしっかりとしました。そのどれもが力強く、温かく、私はたくさんの方のエネルギーをもらったように思います。そしてその時の皆さんの顔が忘れられません。私が被災地へ行くことができて様々な衝撃を受けて、こんなに考える機会と人の温かさに触

れる機会をつくって下さった全ての方に感謝しています。ありがとうございます。このとても濃い三泊四日を自分の中にしっかりと整理して残して、また自分にできることを考えていきたいと思えます。そして是非とも、またこの“被災地に学ぶ会”に参加させて頂きたいと思えます。

本当に、ありがとうございます。

★★兵庫県20代 女性★★

この三泊四日、貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございます。

「ガレキは瓦礫ではない」「丁寧にしましょう」と先生方から行きのバスの中でお話がありました。私は五月頃、友人と三人で個人的に福島県へ行つて被災された方のお家で泥かきやガレキの運び出しなどをさせて頂いた事がありました。その時は、一件のお宅につき20数人のボランティアが一生懸命にそれぞれ自分出来ることをやりました。ただ、今思うと早く片付けよう、一件でも多く、という思いから「丁寧にやる」という大事な部分が抜けてしまっていたかもしれせん。そして今回はとにかく丁寧にしようと思えました。

避難所のリーダーである浅野さんのお話の中で、避難所のトイレ掃除の重要性についてお話を

れていました。汚い場所はどんどん汚くされる。

そして人の気持ちまで汚れてしまうのだと感じました。掃除に学ぶ会の皆さんの「徹底的」な掃除のされ方を見て、今までの掃除に対するイメージが少し変わりました。掃除は「やらなければいけないもの」と思っていました。そうではないような気がしました。体育館の二階の窓と細い通路を掃除していた時、避難所の方が「震災直後は人が溢れてたから体育館のあの上の通路で寝てたんだよ」と言っておられたのを思い出し、こんな虫のいる埃っぽい所で寝ておられたのかと被災された方の当時の様子を想像しながら、出来る限り綺麗にしたいという気持ちになりました。浅野さんが楽しそうに雑巾がけに参加されていた様子、また掃除が終わって避難所が体育館に戻った時、避難所の子達とバスケットをしている方がいたり、それがとても印象的でした。

そして被災地の方々とお話させて頂きました。牡鹿半島で土砂の片付けのお手伝いをさせて頂いたお家の方は色々と気遣ってくださって、お茶やお餅などを出してくださいました。「大丈夫か」とたくさん声もかけて頂きました。大した事が出来なくて申し訳なかったのですが、あったかい気持ちにさせて頂きました。鹿妻小の避難所の方々には震災当日の事も話して下さり、大変な思いでお家から持って来た昔の写真を見せて下さいま

した。「あなた達は人生これからだし困難があると思うけど、大丈夫。強く頑張りよ。」と言って下さった方、帰り際「ありがとうございます。気をつけて帰ってね」と言って下さった方もいました。大変なご苦労をされているのに突然来た私にそんな言葉をかけて下さいました。胸がいつぱいになりました。

大きな瓦礫は撤去されてもいまだに手付かずの風景。大川小学校の衝撃的な光景。浅野さんの方から伺ったお話。実際の現場を見たり、被災された方の思いを聴くほど、なんと行って良いのかわからないというのが正直な気持ちでした。でもこの貴重な経験をどうにかして生かさなければと思えました。人に伝えたいと思えました。その為に学び続けたいといけないと分かりました。

三泊四日を通してたくさんの方々から刺激を受け学ばせて頂いたことで、今までの自分への反省点が見えてきました。浅野さんのお話の中の「頑張れる人になるためには普段から頑張つてないと頑張れない。人は簡単には変わらない。」という言葉。とてもずしんと心に残っています。私はちよつとやそつとの努力では変わらないと思います。でも一つずつ積み重ねて少しでも前進できるようにになりたいです。たくさんの方々のお力のお陰で、今回被災地で学ばせて頂いた事、本当にありがとうございます。

★★大阪府50代 男性★★

「生きることとは諦めないこと」。今回の被災地の学ぶ会に参加させていただいて強く感じました。私自身、今回は四度目の被災地になります。今回、本学野球部員を40名参加させていただきましたのも大谷先生はじめ、被災地に思いを馳せておられる方々のお陰であると心より感謝申し上げます。決して私ひとりではどうしようもないことが、こうやって実現できますのも受け入れて頂ける心ある方々がおられるからだと感じます。

そして八月に伺ったとき、半年以上も避難所で被災者の方々のお世話をされている浅野仁美さんのお話を伺い、その献身的に活動をされている姿勢を見て感じたことは、浅野さんも被災者であるのにここまで人のために尽くせる人はいないと感じました。「自分だったら・・・」と考えた時に本当に頭が下がる思いになりました。そして小学生の娘さんも実にしっかりしていました。きっと寂しいこともあるだろうし、話したいことも甘えたい時もあるとは思いますが、お母さんの働く姿を間近で見ているうちに自立していつているのだとも感じました。大人の姿勢、親の姿勢が子供を成長させるのだと浅野さん親子から学ばせて頂きました。浅野さんを拝見していると、私の中で、どこか大阪の釜ヶ崎でボランティア・ケースワーカーをされている入佐明美さんと重な

ってしまいます。

今回、私自身が一番印象に残ったのが、私たちの前で「この日が来るとは思っていなかった」といって涙ぐまれた浅野さんの姿を拝見し、人には言えないご苦労、私達では想像すらできない厳しい現実、人間関係、そういったことを一手に背負って生きてこられたのだと強く感じましたし、こうやって避難所の方々がここまでこれたのも浅野さんがおられたからだと感じました。「浅野さんが一番しんどい思いをされているから・・・」といって涙ぐむ避難所の人を見たときに、人を支えるとか、人を救う、人を助けるといふことは軽々しく口で言うものではないと強く思いました。

今回参加するに当たり私の中で気になっていた事がありました。前回に鹿妻小学校で知り合った方がおられます。その方とは、八月に鹿妻小学校の周りの草取りをしていた時に一緒に手伝って頂いたお年寄りの方です。私は、今回この方がおられないことを願っていました。すでに住まわれるところが決まり避難所を出て行かれていることを願っていたのですが、避難所に着くとまだおられ、最初はどうか声をかけていいか分かりませんでした。そして話かけると覚えて頂いておりませんでした。その方は、二十四日の最終日の出発の際にわざわざバスのところまで出てきて頂きました。

「また、会いにきますから、お元気で」というと、「もう会えないかもしれない・・・」と言って涙を流されました。「ここでは会えないかも知れませんが、どこかで会えますよ」と言うのと黙って下を向いてうなずいておられました。

また、今回は、本学の野球部員40名と一緒に参加させていただきました。私自身、最初は自分が被災地に足を運び出来ることをやらせていた、だくという考えだけでした。しかし何度か足を運ぶ中で、ひとりでも多くの学生を現地に連れてくることが自分の役目であると感じました。そんな中、今回一緒に参加の西貝雅裕先生が仙台出身であるという縁から、二日間に渡って「野球教室」を提案していただきました。20名づつに分かれ、牡鹿半島活動組と野球教室組に分かれての二日間でした。

一日目は、石巻工業高校、古川高校の二校で合同の野球教室を行いました。会場の石巻工業高校は、前回の台風の影響でグラウンドに60センチ水が溜まり、野球が出来る状態ではなかったと伺いました。ボールもその時に水に浸かったそうです。その石巻工業は、我々が大阪に戻った次の日の秋の宮城県大会の準々決勝に勝ち、二十七日の準決勝でも勝って決勝戦に進み、初の東北大会に出場権を獲得されたという嬉しい報告をいただきました。来春につながればと願っております。

二日目の鹿妻小学校での野球教室は、「子鹿クラブ」という小学生の野球チームとの交流を持たせて頂きました。実は、八月の第二回・被災地に学ぶ会に参加した時、鹿妻小学校の校庭で小学生が野球の練習をしていたので帰りのバスの出発までの時間を利用して子供たちの練習を見ていました。今回の野球教室をさせて頂いたのが偶然にもその時のチーム(子鹿クラブ)だったので。

大学生たちも子供たちに教えるというよりも一緒に楽しんでくれておりましたし、子供たちも一生懸命に取り組んでいました。こうやって野球を通して子供たちと関わっている時間は、遠く被災地に来ているという感覚など忘れてしまいうくらい、また初対面でありながら大学生たちは小学生と同じように必死にボールを追いかけました。小学生時代は、みんなこうやって野球をやっていたのかと思うとどこか懐かしい、素晴らしい空間に感じましたし、時間が許すのであれば、ずっとこのまま好きだけ続けさせてやりたいと思いました。また今回の小学生の野球教室をさせて頂いたにあたり、三重県の喜田健児先生よりご連絡をいただき、NPO法人「未来の絆」からボールを5ダースご用意いただき、部員の代表者から小学生のキャプテンに贈呈させて頂きました。子鹿クラブは、三月の震災の影響で存続もあやぶまれていたようですが、関係者や保護

者のご理解・協力で五月より再開することができたと伺い、ボールもすごく喜んでいただきました。遠く離れた地で野球を通して交流を持たせていただけたことは、私にとりましても学生たちにとりましても本当にありがたく、貴重な経験をさせて頂きました。お世話いただきました西貝先生はじめ、石巻工業高校、古川高校関係者、子鹿クラブ関係者の方々に心より御礼申し上げます。

今回二日目の避難所の清掃では、千種敏夫さん、波多野勝彦さんの東京チームとの合同でさせて頂きました。皆さんの手際の上さ、無駄のなさ、そして丁寧さを拝見しており非常に勉強になりましたと共に、志の高さが実際に場の空気を変えたのだということを実感いたしました。浅野さんは常々「避難所になる前の体育館よりもきれいにしてお返ししたい」という思いをずっともっておられたということも伺っており、このタイミングで東京チームと大阪チームが合同でできたということも導いていただいているのかと感じずにはいられませんでした。

そんな東京チームの中には、香川県から来られた現職の警部でもある國方卓さんが親子で参加されておりました。息子さんも一生懸命に取り組みまれておられ、同じ息子を持つ父親として父親のあり方、親子のあり方を学ばせていただきました。大阪チームの中にも、長野県から合流されまし

た宮本賢一先生がおられました。長野県の先陣を切って参加された先生の勇氣、行動力を拝見して、こういう先人がおられるから長野の教育、若い先生方が今後育っていくのだと強く感じました。そして帰りの道中の高速道路のバス停で、夜中の二時にバスを降りて行かれた宮本先生の後姿に頭が下がる思いでした。

学生たちにとりましても多くの経験をさせて頂いた中で、大川小学校へ足を運んだことは口では言えない初めての経験だったのではないかと思います。一人ひとりが祭壇に手を合わせて戻って来る中には涙ぐんでいる学生もいましたし、心で感じ、魂で感じるということがこういうことだというふうに感じた者もいました。

私自身が一番一緒に来れてよかったと感じたのは、石巻を離れ大阪に向かう車中、体験発表を行ったときでした。私自身、一人ひとりがどう感じたのか、何を得たのか、ということを考えていたのですが、学生たちの体験発表を聞いていて、そんなことはどうでもいい、何を感じたかではなく、何を心に刻み込めたかが大事だと気づきました。それは、人にどう伝えるかではなく、自分自身がどのように生きていくかだと強く思いました。私自身もそうですが、震災がなければ学生たちも宮城県・石巻にはきつと一生来なかったと思います。しかし、今回のこういう機会、ご縁とい

うものは、野球で勝った・負けたよりもずっと大切なことであり、そこには人とかかわり、人のつながり、人との絆、人間としての生き様があるのです。どのような状況でも「決して諦めることなく生きること」が如何に大切であり、尊いことかということを学ばせていただいた四日間になりました。

今回尼崎を出発した行きバスの中で、DVDを観た後で金先生から学生たちにお話をいただきました。その中で、ボランティアで大切なことは、「知ること」「少しだけ分けること」「自身を懸命に生きること」という池間先生のお話がありました。このお話を聞いていて、ボランティアという枠を超えて、普段からこういう気持ちで自分自身も生きて行くことが必要なのだと気づかせていただきました。ボランティアとは単なる人助けということではなく、活動を通して自分と向き合い、自分の生き方を見直す場でもあると強く感じました。そして、これまでの「知覚考動」ではなく、「知覚動考」（ともかくうごこう）にしていくという内容のお話は被災地に入る前に自分と向き合うきっかけになり、金先生のひと言ひと言はすごく新鮮で、学生たちにとりましても心に響く内容でもありました。

今回の四日間、何人もの学生たちが参加者の先生方や現地の方々からお声をかけていただき、

お話をさせていただきました。志高い先生方のご縁、皆様方の姿勢・実践力は、学生たちの目に焼きつき、心に響くものであり、自分を見つめ直すことにもなったと思います。世の中にはこういった素晴らしい先生方、思いを行動に変えて動いている立派な大人がいるということを感じてくれたことと思います。

行きのバスに乗り込む際、京都の大西由香さんから手さげ袋をいただきました。ずっしりと重いその中には、今回野球部の学生が参加することを知られて坂本様という方が握っていたいたおにぎりが入っていました。現地に行かれない方がこうやって思いをおにぎりに込めて届けていただけたことは学生たちにとりましてもすごく力になりましたし、その心の奥にある優しさに感動いたしました。改めて、色々な方々の思い、ご協力があって自分たちがバスに乗せていただいているということ、毎回このような機会を与えていただけます「日本を美しくする会」の鍵山秀三郎先生のご理解、ご協力に感謝申し上げます。そして強い思い、高い志を持った先生方が同じ方向に向いて行動を起こすことで、被災地の方々にも伝わるのだということを改めて強く感じました。

避難所のリーダーの浅野さんも話されていましたが、避難所の人たちは、実は避難所を出てか

らの生活が本当は大変で大事であるというお言葉。それは我々に取りましてのこれからの活動が大切だということにも通じるものでもあるように感じました。人間はひとりでは生きていけない、どんな小さな当たり前でも感謝できないでいると一見よいことをしているように見えても、実は人を傷つけることにもなり兼ねません。「自分はこれだけのことをやったのだから」という思いがつた考えではなく、常に「くさせていたただいている」という気持ちで今後も参加させていただければと思います。ありがとうございます。

★★奈良県30代 女性★★

金先生の言葉で言うならば、「知覚動考」という一心で、今回も参加させてくださいとお願いのメールをしました。でも今回はいつも一緒にさせて頂く志乃先生がいらつしやらないので頼りない自分が一人で参加できるのか心配でした。しかも、出発当日の朝、クラスの子が喧嘩をし、「これは放課後も対応におわれてしまうかもしれない。」と、今回の参加を諦める覚悟をしました。それぞれの話を聴きしていると、どちらの子も次第に穏やかになり、お昼までに納得をしてくれ解決できました。その時、「行ってきなさい」ということなのかなあと、なんだかその二人に感謝で

いっぱいになりました。行きのバスでそんなお話を古松先生とでき、二班の移動するバスの中ではヒサさんの生き方に触れられたり、由香さんが私に細やかな気配りをして下さったり、下さんの楽しさで、出発前の心配は嘘のように消えていました。

今回参加したいと願った一番の理由は、サエコさんと、阿部さんにもう一度お会いしたかったからです。何の特技もとりにえない私を無条件に受け入れて下さるサエコさんの大きさ、阿部さんのぬくもりの中に見え隠れする強さが、一体どこからくるのだろう…そう思って、お会いできることをとても楽しみにしていました。

一日目の活動は避難所の草引きでした。黙々と草を引きながらあつという間に一回目の休憩をしました。その後、作業の前の青空コンサート…。基さんの柔らかい歌声は、つい「黙々と（ひとりで）してしまう」私の心をとかしてくれました。それだけではなく、近くにいた小学生の仲良し三人組とのつながりまでもつくってくれました。「手伝ってもいいですか。」と三人は声をかけてくれました。いろんなお話をしてくれました。「わあ！ここ、あれ以来登ってないから嬉しいー！」と駆け上がり、てっぺんの草を集めてくれました。「あの子の好きな子はねえ、」と恋バナをしていたとき、「地震の時こわくて泣いてたら〇〇くん

が大丈夫って言ってくれたんだよね。」とか、「私の家は近く。」と話していて「全部流されたから引越したの。」と話す彼女たち。言葉の奥にあるこの子たちの心が気になってしまいました。そんな思いとは逆に、彼女たちはわたしたちを気遣い、（気遣うという意識なく気遣ってくれる彼女たちはいろんなことを「遊び」や「楽しさ」に変える名人でした。）「ジュースくじするから来てく。」と言ってジュースを持って来てくれたり、お昼からも草引きを手伝ってくれたりしました。その中で、なにより嬉しかったのが「楽しいー！！」

「いつもの草引きは楽しくないのに、今日は楽しいよねー！！」
と言う言葉でした。帰りのバスでも麻里さんが言っておられたように、「笑っていられるう。」という言葉も、本当に嬉しかったです。「楽しんであげよう」と意気込んだわけでもないし、楽しむために何かを考えたわけでもないのに、「楽しい」と感じられたり「笑える」自分に気づき、それを素直に言葉にできる彼女たちにとっても魅力を感じました。あんなふうに自分の心に真つすぐでいれる彼女たちをととても素敵だなあと感じました。
そんな彼女たちの「友達を一人亡くした。」という言葉をひろわれている夢森先生（彼女たちが

つけてくれたニックネームです）の引き出すかわりを帰りのバスで知り、私の知らない彼女たちの素顔を感じました。

二日目の牡鹿半島では、今回の台風の影響で浸水してしまったお宅のお手伝いでした。そのお宅のお母さんは「地震では大丈夫だったんだけどねえ。台風でねえ・・・。」

と話して下さいました。胸まで水が来て、その状態で一時間もいてらっしゃったそうでした。ようやく消防隊が救助に来てくれ、ロープを張ってあげてくれたとおっしゃられていました。その時ふと、避難所の朝、大丈夫な家もあるのに、私の所は全部流されて…悔しくて…と話しかけて下さった方のことを思い出しました。どうすることもできない、誰のせいでもない、不安や苛立ちを思うと何とも言えない気持ちになりました。

お昼はおむすびや飲み物、リンゴやなし、煮物や鯨、お漬物まで今ある全てのもを出して下さいているのではないかと思うくらい、ごちそうしてくださいました。こんなときであっても、こうやって大事にしてくださいることに感謝でいっぱいでした。

ここでのお手伝いは、山形の「日本を美しくする会」の方々とご一緒させていただきました。丁寧に丁寧に細かいところまでされている背中を見て学ばせていただきました。作業しながらお話

する中で、一回目に向かわせていただいた雄勝町でのことや、バスを出して下さる会の方々のことを思いました。七月に別のバスで向かったことのある私は、作業場の近くにトイレがなくて当たり前なのだと思いました。でも、雄勝町には七月の時点で仮設トイレがあつて水まで引いて下さり、テントをたてて日陰を作ってくださいっていました。それは、それまでに行かれ、日々丁寧に活動されていた「日本を美しくする会」の方々の姿があつたからなのだと思ひ思ひました。そのおかげで今回も行って頂けることに感謝しています。本当にありがとうございます。

今回、参加された皆様にもとても感謝しています。ありがとうございます。また一緒にできることを楽しみにしています。

そして、教室にいる子たちが大産大の野球部のメンバーのような素敵なチームになれたら…みんなお兄ちゃんたちみたいになれたらなあと思ひました。そのために自分のできることを見つけていたら…と高い高い目標を無謀にもいっています。またその秘密を教えてください。ありがとうございます。

★★京都府40代 男性★★

今回被災地へは二回目、この会での参加は初め

ででした。「被災地という場をお借りして人としての生き方を学ぶ」という言葉、まさにその通りだと感じました。

大谷先生がトイレ掃除やボランティア、一回や二回やっただけではかえって傲慢になる。だから続けなければならない。胸にグサッと来た言葉でした。どこかで「ボランティア」に行っているという傲慢さが出ていた気がします。本当の意味で、「させてください」学ばせていただいた、と言えるよう、日々の自分を戒めねばと感じました。

被災地で考えたこと、感じたことで、特に印象に残っているのは三点です。①大川小学校の教員や浅野さんの立場になったときに、自分は果たして何ができるか②被災地の方の受けた衝撃の大きさの再認識③浅野さんの「震災を経験したから」といって、人間が変わるわけではない」ということ

①について、大川小学校では胸が詰まりました。今でも言葉になりません。初めて現地に行かせてもらい持っていた印象がまったく変わりました。報道では、「なぜ教師たちは裏山に避難させなかったのか」という非難が主流でした。二次元的な地図を見て私もそう感じていました。でも、現地での急斜面を見、倒壊した校舎を見、慰霊碑を見、いかに浅薄な非難をしていたか恥ずかしくなりました。

当日、そんな生半可ではない逡巡があつたと思います。それでも尚、救えなかった命。もっと、もっと以前の備えが必要だと感じます。翻って、自分の職場で今何か「災害」が起こったらどうするか。結局、教員として「判断」を放棄せず、人任せにせず、色々な場面で「責任」を感じながら判断することを習慣にせねばと感じます。浅野さんのされていることでもそうです。純粋な「無私」。そんなことが果たして自分にできるか。しょーもない「私利・私欲」が出まいか。怖くなりました。

②について 体育館の泥を落としながら、泥ですらこんなに落ちにくいのに、被災された方の心の「泥」は、簡単に落ちるものではないと、そう感じてしまいました。そう思つて、床に向かわせていただき

③について 最も強く心に残りました。「震災があつても人は変わらない」。

震災を経験してそれを生きて乗り越えてこられた方々は、そのことで、「強く・たくましく」なられたと勝手に思っていました。でも、人は「変わらない」。

朝寝坊する子は、避難所でも朝寝坊だし、太つて自己管理できない人は、一時期食べるものが無くて痩せたけれど、結局ぶくぶく太つて、わがま

まな人は、わがままのまま。

それまでに頑張っていた人は成長するかもしれないけれど、結局、震災までのプラス面とマイナス面が増幅される！

そう思うと、普段から、今まで以上に、自分と生徒たちに向き合わねばと思いました。

皆さんの発表を聞いてみると、「ありがとうございます」と本当にたくさん言ってもらった、という感想ばかりでした。また、大谷先生はじめ、日本を美しくする会の方々のバックアップやご配慮、少し気づけた部分だけでも、こんなに凄いことと頭が下がることばかりです。

1人の100歩より、100人の1歩。その通りだと思います。そして、教師である、自分だからこそできる、伝えられることもあると思います。私が目の前の生徒たちに語る、伝えることによって、これからの世代が変わる可能性があるはず。また、生徒の後ろにおられる保護者に、生徒の口から伝えることで、さらに広がる可能性があるのではないのでしょうか。

そのためにも「思っている」だけではなく「行動」が大切と痛感しました。松原先生を見習って、全クラスでこの話をさせていただきます。本当にありがとうございました。

★★大阪府40代 男性★★

はじめに

「被災地に学ぶ会」参加させて頂くこと、四回目となります。NPO法人「日本を美しくする会」のご厚意に甘え、皆勤で「学ぶ会」の支援活動に携わらせて頂けることに、心より感謝申し上げます。

私たちがお世話をして下さっている大谷育弘先生が帰途のバスで「石巻に行くたびに周囲のご迷惑となることが多くなっている」と仰っていました。ご指摘の通りだと思います。学ばせて頂いてばかりで、被災した方々や「美しくする会」の皆様（義援金を下さった全ての方々も含む）、同志の皆様にも何もお返しできていません。苛酷なスケジュールでのバス運転をお引き頂いた安井様や井上様にも、満身に謝意を伝えられたとは思えません。まだまだな自分で、本当に申し訳なく思います。

ただ、感想文を書くというこの機会を有難く活かさせて頂き、私が学んで参りましたことをお伝えするという形で、ご厚意のお返しを少しでも下下さい。

一科目め「被災地域の現地情勢」

三月十一日に東日本大震災が起こり、それから一ヵ月ほどは仕事も何も手につきませんでした。

被災地に果敢に飛び込む若者たちを前に、自分も現地入りすべきかどうかを考えましたが、結局は躊躇して何もできずにおりました。

そんななか、鍵山秀三郎相談役や原田隆史先生、池間哲郎先生、松崎運之助先生をお招きし、チャリティ講演会をさせて頂くこととなりました。私はその催しのお手伝いに、微力ながら打ち込まさせて頂きました。それが、四月〜六月のことです。しかし、「現地の状況をどうしても生で見たい」という思いは止まず、結局は何の現地支援もできていない自分に地団駄を踏んでいた毎日でした。「美しくする会」と大谷育弘先生の呼びかけにより、「第一回被災地に学ぶ会」の参加者募集が行われたのが、ちょうどこの時期でした。私は喜んで参加を申し込み、七月上旬に石巻市雄勝町での遺留品整理と瓦礫処理の活動をさせて頂きました。

真つ二つに折れた電信柱、建物の四階屋上に頭を突っ込んだままの観光バス、家屋が流された荒地に散乱する漁業用の網やブイ、湿ってかびた布団や衣服、真つ黒の水が溜まったままの浴槽、何より強烈な匂いと大量発生したハエ。テレビで見る戦場の光景さながらでした。

第二回の「被災地に学ぶ会」では、宮城県の南東端牡鹿半島で活動をさせて頂きました。「おしかホエールランド」近辺を見渡すと一面が瓦礫の

野原でした。八月初旬になっても瓦礫の処理が一向に進んでいないことに驚きました。しかし、現地のボランティアセンターの遠藤太一様によると、それでも瓦礫処理は八〇%終了しているというものでした。牡鹿半島に向かう県道二号線のすぐ横は海でしたが、地盤沈下が激しいため、満潮には道が水没しました。

第三回では、牡鹿半島の鮫浦地区を担当させて頂き、今回(第四回)はボランティアセンター近辺の鮎川地区を担当させて頂きました。第四回は、台風によって土砂崩れや床上浸水などの天災を再度こうむったため、まるで「一からやり直し」と言わんばかりに泥出しからお手伝いすることになりました。流されてきた大量の土砂を、屋内や側溝から搬出する作業も行いました。いくら搬出して、土砂は減らないみたいに見えます。ここでは鍵山相談役の「一つ拾えば一つだけきれいになる」の言葉だけが活動の指針でした。

震災から半年以上経った今でも、人手はまだまだ不足しているのです。

二科目め「心育」

八月初旬の第二回、そして今回九月二十三、十四日の第四回被災地に学ぶ会では、鹿妻小学校避難所で一泊お世話になりました。そこでは何名かの避難所暮らしの方とお話をさせて頂きまし

た。今から思えば、どれだけ「上から目線」でお話をしていたのか、恥ずかしくなります。人の「お家」に勝手に上がりこんでおきながら、中腰のままで話しかけ、思い出したくもない震災当時のことを聞き出そうとしたり。それでも、そんな私に珈琲を入れてくれ、他愛のない話をして、和にくわえて頂きました。第四回では、約束した「絵の具セット」を買い揃えて避難所まで持参し、プレゼントできました。そして、快く受け取って下さったその方は「私、絶対絵を描いて送るからね」と言っておきました。おこがましいことは百も承知ですが、実直な感想を申し上げるならば、鹿妻が第二の故郷のように感じました。

牡鹿半島で今回土石流の処理をさせて頂いた時、そのご自宅の方は終始私たちの活動を気にかけて下さり、手作りのおにぎりやら冷たい飲み物やら、休憩のたびに差し入れて下さいました。震災がなければ市役所や業者などに要請していたであろう泥出しや瓦礫処理。差し入れなさるにしても、近くに店があれば豊富な食材で多彩な食事を用意して下さったのだらうと思います。しかし、実際はそんな状況にない。食材も何もない。また、そんな経済状況でもないはず。だから、おにぎり一つ。たつたおにぎり一つに心をこめて、誠の気持ち伝えて下さるのです。何もないからこそ、今あるものに最大限の誠を注入して下さい。

それはおにぎりとかの物品だけでなく、たつたひと言の言葉であっても。目に見えない大切な心そのものを学ばせて頂きました。理屈ではなく、教科書もなく、記憶力を働かせる必要もなく、ただ感じるだけでいい。その誠の気持ちの交歓に感動しました。

今回、また色々とお話させて頂いた避難所の方々がこうおっしゃっていました。「震災のおかげで楽しい(避難所)生活でした」「色々なことを学べました。若いころはあんまり勉強してこなかったから、こんな歳でも学ばないとね」と。ご縁の有難味というものを噛みしめておられました。古希や喜寿を越えた方々が人生を前向きに捉えようとされるそのお姿。心の中で合掌するほかありません。それこそが私にとって究極の学びでした。

三科目め「同志の学」

この「学ぶ会」に参加される方は、当然ながら何の損得も考えずに、心意気ひとつで参加された方ばかりです。往路のバスで一人ひとりが自己紹介され、復路のバスで感想や反省を述べ合う、これもまた非常に価値のあるものだと思います。

私は毎回石巻入りする際に、自分自身の目標設定をしていきます。今回の目標は「一人の思いや祈りを背負って活動する」というものでした。とい

うのも、今回は運動会シーズンと重なっているため、小学校の先生方が公務で参加できないというケースが多く、「私の分まで顔張ってきて下さい」とのお気持ちを何人かの方々に託されていたからです。第三回の「学ぶ会」に参加されていた山路直美先生や永地志乃先生、そして鹿児島島にお住まいの堺若竹読書会創設者中島和之様からのお気持ちを頂いての、今回の石巻入りでした。

「人の思いを背負って活動することとは何か。そんな自問を往路のバスですつとしていたところ、山城大悟様より有難いお話を頂きました。そう。結局は一生懸命目の前のことに取り組むこと以外に答えはないのです。おかげさまで、牡鹿半島ではいつもにもまして、精一杯働かせて頂きました。どれだけ山路先生や永地先生、中島様の思いに応えられたかは自分で全く分かりませんが。また、牡鹿半島で土砂運搬等に大活躍だった大阪産業大学野球部の学生の皆さんからも学ばせて頂きました。何も言わず、「ハイ」のひと言で重い土砂を根気強く運搬されるその姿が十分に学びであり、また感謝するほかありませんでした。老若男女は全く関係なく、学ばせて頂ける同志の方々に本当に感謝いたします。

四科目め「体育・掃除道」

今更ながら申し上げるのも変かもしれませんが

が、私は大谷育弘先生を心より尊敬しております。大谷先生は人間の「プロ」だからです。人間の「プロ」とは単純なことです。時間を守り、約束を守る、ただそれだけのことです。しかし、それを完璧に成し遂げることの難しさ。少なくとも私にはできていないことばかり。「学ぶ会」の作戦会議等に携わらせて頂き、大谷先生と動きを一緒にさせて頂く中、改めてその偉大さを感じます。

その偉大さと同じオーラを感じるのが、墨武司様や渡部ヒサ様をはじめとする「日本を美しくする会」の重鎮の皆様です。今回、一日目に、体育館のトイレ掃除をお願いしたのですが、何とトイレの窓を枠から外し、窓枠の溝までお掃除されていました。使用する道具を終始きっちり揃え、また終了後にはスポンジやブラシ、金属のへらなどをキレイにして、天日干しされていました。普通ならば、どこかの過程で妥協が入ってしまうところかと思えます。私心に負けず、やるべき公務をやり切る。それは大谷先生同様に完璧な所作でした。

私心に克って公務をやり遂げる。妥協する心を抑えて、約束を果たし切る。自分の怠け心を押し殺して、人様への誠意を最大限伝える。そういった動きができていくかいかは、普通に立ち話をしていくだけで分かります。携帯電話を片手に人の話を聞くのか、頬杖をついたり、膝を組んだ

りしたまま話を聞くのか、ガムや食べものを口に入れたまま話を聞くのか―それとも、腰骨を立てて全身全霊で人様のお話に傾聴するのか。大谷先生や「美しくする会」の皆様に通じているのは、そういった日常の美しくして完璧な所作です。

私心に克って公務をやり遂げる。それは、目の前にある土石流の土砂を運搬する時にも守らなければならぬ戒律です。怠けたい心を放置しておくと、必ず易きに流れてしまいます。「こんな重いものを運搬するより、あっちの掃除を短時間で終えてしまえばいい」と、少ない労力で見た目の成果が大きそうな対象ばかりを探してしまえます。目の前にある本題から逃げ出してしまおうとするのです。

だから、今日は逃げ出してしまおうとする弱い自分と意識的に向き合いました。その際、運搬のパートナーをして頂いたのは光岡智史先生でした。おかげさまで、何とか最低限の公務はできました。これを書かせて頂いている今、すでに筋肉痛です。こうして、掃除道とともに人間学や体育の学びを得ました。大谷先生、墨様、渡部様、平井久造様、光岡先生、有難うございます。

五科目め「リーダー学」

第三回、第四回と「学ぶ会」に参加させて頂いているなか、若い先生方が私のことを「俺の師匠」

「リーダー」などと冗談交じりに呼んで下さったり、食事の際にもご一緒して下さいと、身に余る光栄を頂くようになりました。「学ぶ会」に参加させて頂く以前には、このような光栄を経験したことはほぼ皆無でした。私の中の何かが変わったのか。本当に不思議でした。

そして、今回、その疑問に答えが出ました。大谷先生から、大谷先生の分身としてリーダー役を拝命するケースが私に増えて参りました。今までなら牡鹿半島行きバスに乗っても、うたた寝していたり、流れる景色をただ眺めていたり、自分のために時間を使っていました。リーダーともなれば「次の行動で手配すべきことは何か。注意点は何か」「どのタイミングでどんな話を皆様にお伝えするのか」「どうすれば皆様が一番気持ちよく、スムーズに活動できるのか」、そんなことばかり考えて頭が一杯です。自分のための時間を少なくして、公のための時間が増えたこと。これがきつと、身に余る「光栄」の背景にあったものなのだ学びました。

結局、人の話に傾聴することから、ボランティアのリーダー（トイレ掃除のお掃除リーダーも同じかと思えます）に至るまで、大切なことは人様に誠心誠意尽くすことなのだ実感しました。私心を贅肉とするなら、公の心、誠の心は筋肉です。例えるならば、大谷先生や「美しくする会」の重

鎮の皆様はボディビルダーのような筋肉隆々の方なのです。とくに渡部様はご年齢や女性であるということとは関係なく、世界レベルのマッチョだと思えました。

リーダーの条件は精神的にマッチョであることだと痛感いたしました。どこまでも人の話に拝聴し、どこまでも疲れ知らずで、どこまでも私心に妥協せず、率先して仕事を淡々とやり切るとともに、いつも人の「気持ちよさ」や幸せを追求すること。そうすれば、庇護される側からすれば気持ちがよく、付いていきたくなるのも自然なことなのです。

ただ、道理が分かることと自分が実践できていることとは全く違うことです。私自身はまだまだ本物ではありません。簡単に剥がれるメッキだと痛感しております。今回の牡鹿半島の活動でも、若手の鍋田宏祐先生にフォローして頂き、多大なご迷惑をおかけしました。鍋田先生なくして二日目の牡鹿の活動はなかったことをここに付記させて頂きます。有難うございます。

おわりに
このように、長々と書かせて頂きました。現地にお邪魔する度に学びの「科目」がどんどんと増えていき、気が付けば五科目にもなっていました。駄文でお目を汚しただけかもしれませんが、どう

かお許し下さい。

この四回の「学ぶ会」に参加させて頂いて得たことは結局、自分がまだまだだという事実です。とくに、数を重ねていく度に、「学びが多かった」などと申しながら、結局は「知ったかぶり」になっている傲慢な自分と出会うようになりました。無意識のうちに傲慢になってしまっている自分に気づき、恥ずかしくなって穴に入りたくなることが今回は何回あったでしょうか。まだまだです。これからも学ばせて下さい。長々と申し訳ありませんが、これが精一杯の思いです。お世話になった全ての皆様、本当に有難うございました。（終）

★大阪府20代 男性★

現在東大阪市で英語教師、ソフトボール部顧問をしております。今回、わたしは、現地の「人」に学ばせてもらいました。前回は、牡鹿半島の現状を見ることで、人というよりは、地震、津波の恐ろしさを感じ、そこから自分には何ができるのかを考えさせられました。

今回は、初日に。避難所の方たちが生活する体育館の掃除をお手伝いさせて頂きました。具体的に、体育館を明け渡す前日の作業として、窓をきれいにしたり、物資の搬入（トイレトペー

パー、ランタンなどをしたりしました。たかが、窓ふきではありませんが、避難所の方たちの思いの詰まった窓であり、鹿妻小学校の子どもたち、先生方の思いの詰まった窓だと思うと、とことんきれいにしたいという気持ちになり、ものすごくやりがいを感じて窓を拭かせていただきました。

夕方には、初めて、現地の子どもたちと触れあうことができました。前回参加させてもらったとき、帰りのバスの中で考えていたことがあります。それは、「自分らしく！力になりたい」ということでした。その中で、子どもたちとサッカーしたいと考えておりました。そして、そのチャンスがやってきました。午後の作業もオワリ、鹿妻小学校から約十五分くらいのところにある銭湯に行くときのことです。たまたまバスの発車時刻が予定より三十分ずれました。そのおかげで、三十分のフリータイムができました。そして、チラッと運動場に目をやると小学生の女の子が四人いました。

すぐさま「おーい！サッカーせーへん??」と問いかけると

子どもたちは、「いいよ！」と即答でした。さっそくグラウンドに出ました。一分も経たないうちに大人三人対なでしこ四人の試合が始まりました。子どもたちの笑い声が忘れられません。元気に生き抜く子どもたちにありがとうの気持ち

でいっぱいになりました。そして、なんと心地良いのでしょうか。あの場面を思い出すとまた心地よくなります。子どもの持つ力つて本当にすごいです。避難所でリーダーをされている浅野仁美さんがおっしゃられていました。

「こどもってただそこで笑っているだけで周りが元氣付けられるのです」と。
子どもには、大人の何倍も笑顔に宿る力があるのだと学びました。

その日の夜は、避難所で現地の方と一緒に寝泊りさせていただきました。九時になると消灯し、シーンと静まりかえった体育館で寝袋に入りました。そのとき、わたしが感じたことは、「自分の弱さ」です。震災から半年以上もの間、暑い日も寒い日も毎日毎日乗り越えられてきた現地の人たちのご苦労を思うとともに、自分に同じことができるのかなという弱さを知らされました。

翌朝、起床すると、隣で眠られていたおばあさんが、「おはよう、一緒にコーヒー飲まない?」となんともいえない優しい笑顔でお声をかけてくださいました。その後もたくさんの方にお声をかけておられる姿に、頭が下がる一方でした。

二日目の活動は、牡鹿半島での活動でした。先日の台風15号で津波では助かったおうちが、台風による土砂崩れによっておうちの中が土砂だらけになっておりました。その台風被害を受けた

おうちのそうじをさせていただきました。一歩おうちの足を踏み入れたとたん、「どうしたらエエんや」という大きな不安が襲いました。しかし、おうちのお母さんの「来てくれてありがとう。本当にありがとう。ありがとう。」と何度も何度も作業を始める前からの「ありがとう」の連発で私の不安は、なくなりました。「よっしゃ！絶対きれいにします！」と何度もつぶやきながら作業をスタートさせていただきました。ずぶぬれになった畳、電子レンジ、冷蔵庫、テレビ、衣服、お仏壇、テーブル、食器、ありとあらゆるご家族の宝物が台風でずぶぬれになってしまっていました。一緒に参加していた大学生の野球部の学生さん、学ぶ会の皆様とひとつずつ丁寧に庭へ運びました。そして、約五時間ほどの作業で見違えるほどきれいになりました。おうちの方も喜んでくださり、ほんの少しでもお役に立てたことが本当に嬉しく思えました。この作業のとき、意識したことがありました。それは、「現地の方にありがとうと言うきっかけを作りたい」ということでした。行きのバスの中で、浅井先生から「現地の方は、ありがとうをたくさん口にされますが、ありがとうと言ってももらうことは少ないのではないか。」とおっしゃられていたのを聴き、大切なことに気付かせていただきました。だから、現地の方が、差し入れを出してくださったときには、心いっぱ

い「ありがとうございます!!」と言わせてもらいました。その直後の「本当? わあ! 嬉しい」というお母さんの笑顔が本当にステキでした。人として一番の喜びは、「人を喜ばせたとき」「人のお役に立てたとき」なのだと思われました。そのためには、現地の方のお心づかいに、遠慮するのではなく心いっぱい受け止めることが大切なのではないかと思いました。

最後になりますが、前回の被災地に学ぶ会から大阪に帰ってきてから被災地で亡くなられた方の分まで一生懸命生きるという目的で三つの目標を立てました。

①すべてのクラス(19クラス約700名)で震災について語る

※九月二五日現在8クラス約320人で実施)

②十月五日の文化祭で「被災地の方にエールを送ろう」というテーマで学年全員で合唱する。

※オワリはじまり(かりゆし58)と明日という日がという2曲を練習中

③自分自身が新しいことに挑戦する(ギター弾き語りへの挑戦)

という三つの目標です。

この三つの目標を達成できるように引き続きがんばります。特に、③の自分自身の新しい挑戦ですが、ギターの弾き語りということに挑戦しております。子どもたちにも、大人が一生懸命挑戦し

ながら生きる姿を見せたいという思いで短期間ではありますが、毎日練習して、第四回被災地に学ぶ会の出発の日に子どもたちの前でギター弾き語りを披露しました。全員ではありませんが、たくさんの拍手をもらいました。そして、バスの中でその様子を音声だけですが、聞いてもらいました。すると、是非、被災地でも弾いてみないか? というお声をかけていただきました。次に行かせていただくときには、東北の方たちに心こめて弾き語りをさせてもらいます。そのために、練習をやめません。いつも東北のみなさんの喜ぶ姿をイメージしながら練習します。本当に些細な挑戦ではありますが、自分が自分らしく一生懸命生きること忘れずに毎日大切にします。このように、自分の生き方を見つめなおす貴重な機会を与えてくださる日本を美しくする会の鍵山相談役、大谷先生はじめ、作戦会議等してくださる方々へ感謝の気持ちを忘れずに毎日大切に過ごします。ありがとうございます。

★★大阪府60代 男性★★

今回初めて被災地に学ぶ会に参加させていただき、先ず未曾有の大惨事に被災地へのバスを提供いただきました「日本を美しくする会」に又この会を大変お世話を下さいました大谷育弘先生

をはじめスタッフの先生方に心から感謝申し上げます。有難うございます。そして私たちを入れて下さった被災地の皆様にもお礼を申し上げます。

地震津波が齎せた大災害に続いての今度の台風15号による暴風雨。あまりにもの惨いこの現象に思わず天を恨みたくもなった。出発を前に、尋常ではない一種の覚悟で被災地に赴かねばならないと感じた。

避難所である鹿妻小にお邪魔し活動が始まった。当初一七〇〇名の被災者であふれたこの避難所も今は三十数名にまでになったとかがらんとした体育館に一種寂しさを感じた。

私たち掃除に学ぶ会メンバーは三人でトイレ掃除担当と決まった。トイレは想像より綺麗なトイレで各地の掃除に学ぶ会が来られ掃除されていること、又被災者が交代で綺麗にされていることが伺われた。そこで手を付けてられないところを中心に清掃をさせていただいた。一見美しいトイレも、なお手を加えることによって空気は一変した。現場に直に触れることの大切さを改めて学ばせて頂いた。

その後、全校生徒の八割が死亡または行方不明となった大川小学校に連れて行って頂きその惨状に思わず全員が無言での焼香となった。その惨事を想像するに、余りにも耐えがたい心情となり

思わず心で般若心経を唱えていた。

あの美しいメロディで歌われた北上川が牙を剥いた「どうして」「何故」の思いが頭を巡る。黄昏迫る、まして立ち入り禁止である筈の、おそらくもう使われないであろう壊れた校舎の中を、一人の男性が無心で掃除をしておられる姿が目

に飛び込んできた。

どうした思いであろうか？
子供を亡くした父親だろうか？ それとも行方不明の子供の父親だろうか？

帰阪した今 あれは幻であったのだろうかときえも・・・

愛唱歌であった「北上夜曲」は悲しみの歌に変わってしまった。

夜、消灯時間が過ぎ避難所のリーダーを努めておられる浅野さんのお話を聞かせていただくこととなった。普通ならお願いすらできないことを快くお引き受けくださった背景には、今日までに大変な信頼関係を構築してこられた大谷先生のご努力があったことであろうことが窺い知れた。

お話の中で「被災者は地震を経験し一時的に人間が変わることもあるが、すぐにまた戻って地が出てしまう」との事を伺い。これは恐ろしいことだとわが身を振り返る。日々の研鑽で確固たる自己を築きあげねばならぬと心に誓った。

二日目 牡鹿半島のボランテアセンターに

向かう。ボランテアセンターには各地から大勢の人々が力になるべく来ておられる。中に山形掃除に学ぶ会の黒沼範子さまをはじめ約30名のお方がお越しになり 一緒に台風の山津波で床上浸水の被害にあわれたお宅の清掃を担当することとなった。

家に入りその有様に絶句する。床は泥だらけ。一緒の班になった大阪産業大学野球部の学生さん大阪教育大の学生さんたちと作業開始。若い人たちのパワーは凄く、頼もしい。手際よく的確に行動。特に重いものなど積極的に運んでくださる。泥だらけの畳は非常に重い。

午前中に家は空き家状態、床板まで綺麗に水洗いし泥は無くなった。若い大勢の力は誠に見事で輝いている。特にスコップで泥をかこうとしたとき、「私がやります」と産大生。何回かそんなことがあり、私はスコップを触っただけとなった。年長者に気を配ってくださいる学生さん。そのようなご指導をなさった宮崎正史先生に敬服をいたします。

被災したその家の年老いたご婦人が、わたくし達に気を遣われ、おにぎりとか果物とか栄養ドリンクまで出してくださいました。被災され避難所に暮らしておられ、ご自分の事すら不自由であるにもかかわらず心遣いしてくださいることの温かさ。心に通い合う何かを感じた。

家には綺麗な仏壇がありそこまでは水没しなかったようだ。仏壇には本来あるべき仏像や位牌はなく、おそらく大切に避難所に持って行かれたのでは等と想像する。お話を聞けば地震の折は津波が寸前まで押し寄せてきたが、辛うじて助かった。だが今回の洪水は深夜でもあり、本当に恐ろしかったとか。胸に達する水位で、高いところに避難するためロープを消防団に張ってもらい漸く助かったと話された。神仏のご加護であったのかも。

午後から細部の掃除を進める。トイレ、窓ふき、庭の泥かき、押し入れ、要、不要品の分別、ごみの分別等、一軒の家の丸洗い状態となり、すっかり綺麗になった。改めて人手のパワーを感じた。夕方になり避難所に戻る。今まで敷き詰めてあった畳が、別の班の力ですっかり元の体育館となっていた。あるべき姿となっている。子供が嬉しそうにバスケットボールをしていた。感動さえ覚える。半年以上にわたっての避難所生活。精神的にも肉体的にも大変苦痛を強いられたであろう環境に、もし自分なら耐えられたらどうか？このことを解決するには、平常時をいかに生きるか、積み重ねて行く事において克服できるのではないだろうかと考える。而今をどう生きるかが命題となる。

避難所の方々とのお別れが迫った。浅野リーダー

「は「有難う ありがとう アリガトウ」を目に涙を浮かべ仰って下さった。こちらこそ有難うで私たちを受け入れ宿まで提供してくださった。普通なら考えられぬことである。被災者の方々には本当に感謝の念でいっぱいである。涙の別れもすぎ、バスの車中の人となる。一人一人の体験発表が始まる。みんな深い思いを語られる。それだけ被災地で学べたことが沢山あって、その時間は四時間半を過ぎた。しかしそれはあつという間の時間であった。各自、熱い心と感謝を話された。特に先生方がこの体験を教育に取り入れ、心の授業をなさろうとされていることが大変ありがたく思った。ついつい学業成績のみに偏重しがちな現在、心の教育ほど大切なものはなく、この熱き先生方の目指されているところを知り、日本の未来の明るさを肌身で感じさせていただく四日間となった。本当に有難うございました。こうした先生方を少しでも応援できるよう微力を尽くしたいと思う。

終わりに、ご一緒させて頂きました皆様方に感謝を申し上げます。有難うございました。合掌

★★兵庫県20代 男性★★

私は今回被災地を初めて訪れました。石巻に向かうバスの中でDVDを見せていただいたので

すが、悲痛な想いにはなりましたが、実感があまり湧いて来ないと言いますか、震災後にテレビの前で涙したのと大きくは変わらないように感じていました。しかし、実際に訪れて自分の目で見た姿は全然違いました。記録された映像と同様の光景が広がっていたことに、「あの出来事は本当だったんだ」という言葉がまず心に浮かびました。あれが幻の出来事であったならばどんなにかという願いがあったのかも知れません。とてもショックでした。

私のそういった認識は本当に切実さを持って考えられていなかった証拠であると感じられました。ところが、その切実さを持つためにも思っ
て現地を訪れてみても、被災された方のお話をお聞きしても、心が張り裂けそうになったとしても、決して「自分のことのように」などは考えられないということに気が付きました。それは私の想像力や共感する気持ちの不足かも知れません。あるいはただの一度訪れただけで寄り添える気持ちではないのかも知れません。更に言えば、「自分のことのように」考えられるようになりたいという思いは、苦しみを分かち合った気になりたいという思いだったのかも知れません。切実さを持つて感じ取るというのは、そんな軽々しいことではなかったのです。現時点の私にできることは、この地に足を運ばせた、「自分に関係のないことで

あるとは思わないこと」という気持ちを、更に深めて行くことしかないと思えました。そんな気持ちには、初歩中の初歩の気持ちであると思えます。ですから、私は今回でやっと、本当に初めて被災地の方へきちんと心と体を向け始めたと言えるのだと思います。

とは言え、本当に大切なことはそれをどんな行動に移すかということです。こうして訪れるまでもそうでしたが、訪れてからも、「どうすればいいか分からない」という状態は続きました。そんな時、同じボランティアの方の姿に、本当に感動しました。ひとはこんなにもひとを想えるのだということ、それぞれの方のお人柄、持つておられる考え、信念、深い愛情に、涙が出そうになりました。もっと重要な事実が、それらを引き出しているのが、被災地の方であるということです。ボランティアの皆さんは、口を揃えて「被災地の方にこちらが元気をもらっている」というようにおっしゃいます。そのようなエネルギーと愛情の受け渡し合いが行われている場所にご一緒する事ができて本当に心が温かくなりました。そして、この体験記がまだまだどなたかの背中を見つめているような立ち位置からの視点で書かれていることを改めて自覚するとともに、またその場所を訪れて、今度は自分の誠もそこに差し出せるようにしたいと強く思いました。

「またその場所に訪れて」と申し上げましたが、今回訪れることができたのも、企画をされた皆様
の存在、先の会で現地の方との関係を築かれてき
た歴代のボランティアの皆様、過酷な条件のもと
私達を運んで下さった運転手の皆様と、様々な人
の力のお陰である事を忘れず、次回に参加したい
ということも当たり前のように発言しないよう
に気をつけたいと思います。たくさんの希望者の
方がおられる中で、今回は本当に「行かせていた
だいた」のだということをお忘れず、心から感謝し、
まずは今回の体験をしつかりと反芻したいと思
います。

最後に、自分にとつてのことばかりを述べてき
ましたが、大切なことは現地の方の暮らしが一日
でも早く取り戻されることです。現地では復興が
思うように進まない状況の中、台風による新たな
被害も生まれているような状況であり、無力感を
感じてしまうばかりですが、全国から多くのボラ
ンティアの方が来られていますので、本当に皆で支
えることによって、少しでも早く被災地の方が安
心した暮らしを送る事ができるよう心からのお
祈りして、私の体験記とさせていただきますたいと思
います。ありがとうございます。

★滋賀県30代 男性★

私にとって、今回で四度目の石巻でした。
鹿妻小学校に泊まるのは、今回がはじめてで、浅
野さんにお会いするのも、はじめてでした。

浅野さんが、夜に、お話をしてくださいました。
必要なものひとつとして、「行政のセンス」と
おっしゃっていたことに共感をしました。という
のは、九月の初旬に、石巻のある方に、お手紙を
いただき、その中で、「お弁当を配るのに、石巻
市内だけで、一日1000万円の経費がかかって
いたこともある」と書かれていたことを思い出し
たからです。そのほか、いろいろなお話をお聞き
して、「自立」がひとつのキーワードだと感じま
した。

さて、私は、今回初日には、石巻工業高校の野
球部の練習会（大阪産業大学の学生の野球教室）
に帯同させていただきました。石巻市内の硬式野
球部員で、津波でやられた高校生はいなかったそ
うですが、やはり、その親族関係となると、教え
切れないくらいなのだそうです。いろいろな想
いを秘めながら、毎日の練習や学校生活を過ごし
ているのだろうと思いました。また、野球という目
の前に一所懸命に取り組むものがあることで、精
神的にも落ち着くことができているのではない
かと思いました。と同時に、逆に、部活など一所
懸命に取り組むものがない生徒や、進学など進路
に関して何かあきらめざるを得なかった生徒の

精神状態を考えると、いてもたってもいられない
気持ちになりました。監督さんとお話をしている
と、「小さなころの荒みが、ちらほら見えてき
ている」ということでした。今後も支援の形が変
わっていくことは間違いないことですが、「教
育」の二文字は、大きなテーマになってくるよう
に感じました。

二日目は牡鹿半島での、瓦礫撤去作業となりま
した。ボランティアセンターにて指示を受けた民
家のお掃除をさせていただきました。その民家は
大変な状況で、畳はびしょびしょに濡れて使えな
い状態。お風呂場や、廊下などは、歩くと長靴の
裏に泥がべつとりと付くような状況でした。

そのお家の方からお聞きしたのですが、今回の台
風で、津波以上の浸水だったようです。津波は床
下の40cmほどの水位だったそうですが、今回台
風のために、山から流れてきた水で130cmの高
さまでに水位があがったそうです。そのような
状況でしたが、我々は、こつこつと掃除をすすめ
ていきました。そのお家の方が、

「年だから動けなくてごめんね」

「ありがとうございます」

「お水をしっかり飲んで、水分補給してね」

と、常にお声かけをしてくださいました。また、
このボランティアではじめて声をかける班のメ
ンバー同士でも、一緒に協力して掃除をすすめて

いくうちに、自然と「〇〇してくれない？」「ありがとう！」といった会話が多くなり、いいチームになっていきました。以前、鍵山先生が「掃除をするとチームワークがよくなるんです」と、おっしゃっていたことがよく実感できました。

今回は四回目でしたが、東北ボランティアでは、回数は関係なく、毎回違った学びをさせていただけます。その中で思うことは、無理をしてはいけません。が、やはり、できる限り多くの方に、直にこの状況を見てほしい、現地の方のたったお一人でもいいからお友達になってほしい、ということですね。そういった意味において、東北へのボランティアに、これほど参加しやすいツアーはありません。大阪便教会主催のボランティアバスに一人でも多くの方が申し込まれることを願ってやみません。ありがとうございます。

★大阪府20代 女性★

一日目は、鹿妻小学校の中庭にある土管の山の草抜きをしました。向かっていると、シーソーのところ男の子が一人座っていました。あとからお姉ちゃんも来たのですが、金先生に会いに来て、プレゼントを渡そうと思っていたのです。プレゼントは、男の子は画用紙に絵を描いて、お姉ちゃんはプーさんのマスコットにメッセージを書いて

たものです。男の子は避難所の子ではないですが、来ることを知り、プレゼントを準備してまでして来たと思うと、ここまで想ってくれているということにとっても嬉しく思いました。

草抜きをしていると、四人の女の子が、「手伝っていいですか」と言っていて、手伝ってくれた。四人は、夏祭りにも来ていた、小学四年生だ。とてもよくしゃべり、笑っていた。

しかし時には、
「この山は、いつ崩れるかわからないから上ったらだめだと言われている」
「このヒビは地震でできた」

「松林の近くに住んでいたけど、津波で家が流されて、学校の近くに引越した」など、話していた。

たくさん話してたくさんしゃべってたくさん笑って、「たくさん笑って楽しい」と、言っていた。

二日目は、牡鹿半島で作業をした。私は、小学校の教師で、出発する日に、子ども達に被災地に行くことを伝えた。そのときに、

「みんなニュース見た？台風15号で東北はまた大変なことになってるらしい。一度避難所を出た人も、また避難所に行ってるみたいやで。今回行って、どんな作業をするかわからへんけど、がんばってくるわ。」といった。

台風の影響で町は冠水し、泥だらけになってい

た。私は一軒の家のお手伝いをした。家の横の水路は土石流で1メートルくらい石や岩が積もっていた。自然の力はすごい。人間が何人も力を合わせがんばっても及ばない。石や砂利を土のう袋につめ、大きな石はそのまま一輪車に乗せて運んでいく。大きなスコップで力いっぱいすくおうとしても、大きな石につつかえてなかなかすくえない。石や砂利をつめた土のう袋はとてつもなく重い。運ぶときに抱えるので、全身泥と水で汚れていた。この家には津波での被害がないように思えたが、もともとないに段差ができていて、家も少し傾いていることを教えてもらった。また、休憩時間にお茶やアイス、お昼にはおにぎりを出してくださった。たくさんのお心遣いをいただいた。終わったときは、「ありがとうございます。」と言っていた。やりきったという達成感があるほど作業が大変で進まず悔しい。でもこの家の方に、良かったと思っただけなら、嬉しい。

避難所に帰ったら、驚きの光景。体育館の中があの暖かな雰囲気。避難所から一変、小学校の体育館に変貌していた。たみはなくなり、子ども達は、バスケットをしていた。本来あるべきすがたに戻ったとともに、この避難所ともお別れになる、そして、この避難所の方々ともお別れになると思うと、とてもさみしかった。

この避難所の本部長である浅野さんのお話を

聞き、涙を浮かべた様子は、今までの長かった日々を感じた。

「一歩前進ではなく、百歩前進です。」
この日を迎えられたことがとても良かった。ここに来て、たくさんのことを学ばせていただいた。また、被災地の方の力になれるよう、続けていきたい。そして、学校に行つて、職員や子ども達にこのボランティアでの経験をお話したい。

★★大阪府60代 女性★★

日本を美しくする会の御支援の賜物のバス仕立て、大谷育弘先生を中心にお世話下さった先生方のお蔭で被災地石巻へ再度参加させていたいただきました。

JR尼崎駅で集合乗車、先生及び先生をめざす学生が大半の中一般人参加です。少し平均年齢を上げる効果？若さあふれる車内、自己紹介と参加動機、熱い想いに心うたれる思いで拝聴しました。

石巻市立鹿妻小学校へは第二回 約一・五ヶ月前の再来ですが、付近も少しずつ前進している様子が見てとれました。被災所では前回御会いした方々と「こんにちは、お元気ですか」と笑顔で御挨拶させていただきました。笑顔が返ってききました。

一日目は墨武司さん、平井久造さんと私のトイ

レ掃除の大先輩と御一緒にトイレ掃除を拝命、午前中は男子便所最初は普段通りの手順でしたが窓の小さな汚れも気になられて様で、窓枠から窓をはずしいつもの時間制限の中と違い今日は心行くまで徹底的にピカピカにしよう。三人の息もピツタリでした。微かな砂も残さないと思いを込めての作業、午後は最初から窓をはずし、大きな時間短縮でした。終わつた後は何とトイレのさわやかな風を感じ、ただ建物外部に新たに設置された最新の水を使用しないトイレ、初めて見るタイプで水で洗う事が出来ず拭くのみでしたがすつきりいたしました。

大川小学校へ出かけますとの声でバスに乗車、野球チームも一緒に、道中先日の台風によりトンネル、道路も通行不能の所もあり、せつかく刈り取るばかりになつていた稲穂も家もあちらこちらで冠水、自然の猛威 なすすべの無い状況むごいと思いました。

大川小学校周辺も少し様変わり浸水、ガレキ山の変化亡くなられた方々の霊前に用意して下さつたお線香をたむけ御冥福をお祈り、使用不能な校舍を掃除されている方があり深く大きな悲しみが増され伝わりました。

道の駅での食事入浴等心配りに感謝。就寝前に浅野仁美様のお話をお聞き出来、当初1700人位から今月中に0人に天の声に耳を傾けられ行

動せざるを得なかったにしろ、被災者にとって素晴らしいリーダーのもと何人かの方は、変な言い方ですが良かったです。リハビリになりました。と明るい声と顔。そこに至るまでの御苦勞浅野様の双肩にかかつていたことをより一層偲ばれました。女性として人として脱帽、お教え学ぶことばかりです。

五時前までぐっすり、光と朝の冷気に包まれていました。東京からのバス到着寅さんの登場。近くの方にお声掛け今後の生活等お話を伺っている内あわただしく出発、今日は牡鹿半島へ、何をさせていただけなのか楽しみ。道中台風による道路等崩壊がいたるところあり、大地震、津波そして台風 手つかずの所多く言葉が無くなりました。

牡鹿ボランティアセンター到着、指示待ちの間、山形からのバスもしかしたらと思つていた黒沼範子様とお出逢い。熱いハグ、便教会総会でそしてこの震災でいろいろお世話になりました。多くの言葉は不要です。ちなみに黒沼範子様は認定NPO法人日本を美しくする会の監事をして下さっています。あいにく行動は別々でした。

津波被害は無かった民宿の台風による土砂の撤去作業。11人中庭と物置の清掃と建物裏、横の幅1.5m高さ1m位の側溝の土砂取り除き作業、一軒下迄は重機が入ったのですが傾斜のため

重機が入らないので要請。側溝は墨さんと私、百香合さんチーム。墨さんは元大工さんとかスコップの使い方も無駄が無く美しい。私は土嚢袋の口をあけ大きな石を別にしながら持てる位に調整の補助作業、何と言っても全部埋まりその上を水が流れての災害いかに今後家に水が入らないように願いを込めて。墨さんは御両親のふるさとで同じように道路が高くなった水害を経験され余計に思いが深く行動に反映されていました。あまり無理せずに腰大丈夫と懸念していました。出来あがった土嚢袋大小の石、土嚢袋は水を含み隣家との塀は、傾き通路は水で流されがらんだ大木先生他学生さん等前をびしゃびしゃになりながら黙々と一輪車あるいは抱きかかえて捨て場に？整理して下さいました。

午後は百香合さんチームは泥をかぶった畳清掃に役割変更。五分休憩です、そして残り三十分の声がかかるが墨さんの時間があったくないに感動勿論異論なし、出来あがった土嚢袋及び石はどれ位。墨さんの予測とガンバリでスーと一ヶ所水が抜ける所ができ、上部から水の流れ道を深くされてため当分は直接家の中に水が入らない状況となりました。「よかった」御苦労さまでした。腰大丈夫でしたか？若い学生の方のも両手に土嚢、一つにしないと腰が悪くなるよ、後で困ると声掛けしながらでも先生方学生さんの若いパ

ワーを見せつけられました。おかげさん納屋のコンクリートの上でもタオルを滑らせる方法威力がありました。

再集合ボランティアセンター前で写真撮影を、山形のバス全員揃いながらも待つていて下さいました。お別れの握手気づきが遅くごめんなさい。また車中で山形からの差し入れブドウおいしくいただきました。民宿の方も休憩時、食事時のお接待喜びが伝わってまいりました。個人の力ではいかんとも出来ないことを、日本を美しくする会ですと伝えると「ああ」と喜びの声がでました。皆さまお疲れさまでした。

鹿妻小学校に到着、見事に空気の澄んだ美しい被難所から体育館に変身した場を拝見。浅野様の念願、当初より美しくして学校に返したいとの願いが最後に確認拝見でき大感動でした。浅野様とも熱いハグお疲れ様、お幸せにと思いをこめて、大谷先生のお蔭、願いは叶うのですね、それにしても日本を美しくする会のお力が感動感動学びそして人の温かさがいっぱい、いっぱい味わわせていただいた四日間でした。今後も素晴らしい方々とご縁が続きますように願いを込めお別れました。

上品の湯では千種様にお声がけいただきいつもお世話になるばかりですのに。ご縁のあったすべての素晴らしい方々のお教え

学びに感謝申し上げます。

鍵山先生の「人が人であるかぎり人はみな美しい」しあわせです。身体も大きな感動のお蔭でエネルギーが回復し少しの心地良い疲労感「ありがとうございました。おかげさま」

★★大阪府30代 男性★★

このたびは貴重な学びをさせていただきありがとうございました。大谷先生始め、避難所リーダーの浅野様、バスの運転手の方々、そして、今回出会った全ての皆様のご縁をありがたく思います。

多くの学びの中から、特に感動したのは、一日目の牡鹿ボランティアセンターでの活動です。私の担当は、台風15号の影響で土砂まみれになったガソリンスタンドの復旧でした。道路はブロックが外れ、穴が開いている状態。地面に散乱した土砂をその穴に埋める作業をくり返し行いました。そんな時に、このスタンドの岡田様が今日に至るまでのお話をしてくださいました。

「震災直後、このスタンドを役所の上から見ていたが、海水がスタンドの屋根の上まで来ていた。水が引いた後は瓦礫だけが残り、まわりの建物も多くがなくなっていました。やっとの思いで片付け、この連休明けには営業を再開するつもりだった

た。この辺の方々にとってガソリンはライフラインに匹敵するほど重要なもの。それだけに街のみなさんの期待も大きいのに。だからこそ、この台風の被害がショックで。」

体中が、心の底から熱くなりました。ここまでの被害を耐え、一生懸命生きている方が、まわりのみなさんのことを考えてつらい思いをしている。なんとしても復旧させたい、そんな思いがこみ上げてきました。

午後からは応援も駆けつけ、作業がはかどりました。掃除だけでなく、営業ができるようにと、側溝の掃除や床磨きまで徹底しました。作業が終わり、「これでまた営業できる」とおっしゃっていた岡田様の笑顔が忘れられません。人のために生きていることがエネルギーになることを改めて学ばせていただきました。

今回来させていただき、長く支援を続けていくことの大切さを改めて感じました。特に浅野様のお話は、まさに「現場の生の声」であると感じました。これらは、報道や人づての話を聞くだけでは分からない。そして、自分も分かったような気になっただけはいけません。そんなことを実感しました。今後実際に足を運び、真摯に学ばせていただく姿勢で続けて取り組むようにしていきます。どうもありがとうございます。

★大阪府40代 男性★

「感謝の心」

まず、鍵山先生はじめ日本を美しくする会のお陰によりまして、被災地に学ぶ会に参加させていただくことができました。大変ありがとうございました。お世話をいただきました、大谷先生、宮崎先生など中心となりご準備くださいました先生方にも心から感謝申し上げます。ありがとうございました。また、往復安全運転にて私たちを連れて行ってくださいました運転を担当された井上さん、安井さんにも心から感謝したいと思えます。いつも皆さんも言われることですが、すべて整えていただいて私たちは行くだけという、本当に学ばせていただいている身分に感謝したいと思います。ありがとうございます。

今回印象に残った事 「リーダー浅野さん」

今回は野球担当だったので、牡鹿には行っていません。ある意味ひたすら汗をかくという貢献はしていません。野球担当とはいえ、直接野球をご指導いただいたり、交流をしていたいたのは大阪産業大学野球部の部員の皆さんです。いろいろの貢献の仕方があるのでなんとも言いがたいところではありますが、今回の学ぶ会で特に印象に残った事は、避難所のリーダー浅野さんのお話や僕の友人からのお話です。（友人からはなしは後述）

多くのお話を直接伺うことができたことが、今回特に印象に残った事です。

僕の友人は鹿妻南四丁目でした。避難所のリーダー浅野さんは二丁目だったそうです。今回直接その頃のお話を聞き、胸が締め付けられる思いでした。浅野さんは娘さんと非難しようとするその時に津波に合われ、雪の降る中、屋根の上、二階で一晩過ごされたこと、ご近所にお声を掛けた年配の方々はそのまま亡くなられたこと、当日のこととは自分の想像とは大きく離れすぎ、イメージすることすら難しいです。

避難所での生活では、1700名もの方々が避難されていた事、略奪ではないにしろ、物を取る事人もいたこと、避難所においても物がなくなつたこと、石巻市が避難所の食費としてかかった費用、最大事で一日1千万円ということ、多くのことを僕は知りませんでした。

半年を体育館で過ごし、結局は被災してようがいまいが人は変わらないという言葉でした。やる人はやるし、やらない人はやらない。学びでした。

「鹿妻小学校体育館」のこと

第二日目、鹿妻小学校は月末の明け渡しを前に大掃除をされました。日本を美しくする会東京本部の方々との共同活動、國方警部の寅さんにはじまり、美しくする会の方々の掃除力の凄さを、身

をもって感じました。今後自分自身も積極的に参加し、学ばなければならぬと強く感じました。今回いよいよ避難所の体育館を学校・子どもたちに返し、仮設住宅に移りそれぞれが自立して生活してクタイムニングにお伺いすることができ、わずかではありますがお手伝いが出来たこと、そのすべてが貴重な学びとなりました。

体育館に泊めていただきました。もちろん寝ました。しかし、これが数ヶ月、毎日と考えた時、やはり想像することができませんでした。支援物資の管理、戸締りなどなど責任者の浅野さんの責任の強さ、ものすごく学びでした。果たして自分だったならば、責任感を持ち避難所で生活できただろうか：答えは出ませんでした。

「野球交流」のこと

今回、野球の交流担当をさせていただきました。宮崎先生のご指導のもと、大阪産業大学の部員の皆さんに第一日目は石巻工業高校において、石巻工業高校と県北にあります古川高校の二チームと交流していただきました。

石巻工業高校は秋季大会中で準々決勝戦数日前でした。宮崎先生はじめ産業大学の学生さんとの交流が非常にいい刺激となったようで、その後の試合において力を発揮され、初の決勝戦進出、結果準優勝、東北大会出場を決めました。結果的に素晴らしい交流会になりました。お昼ごはん

は保護者の方々にカレーをご馳走になり本当にありがたい歓待を受けました。今は東北大会でも活躍をしていただき、春の選抜大会に選出される事を願うばかりです。そうなったならば、本当にミラクルですが、かなり運を引き寄せている気がしますので、大いに期待を押ししています。

第二日目は鹿妻小学校の野球チーム、小鹿クラブでした。子どもたちは心からの笑顔で大学生の皆さんとの交流を楽しんでくださいました。保護者の方々から見てもはじけるような笑顔だったようです。中には自宅が流され、仮設住宅で暮らしている子どもさんもいらつしやるとの事で、転校したりと、野球の時だけが今までの友達と過ごす時間ということでした。野球も大事なある意味癒しの交流の場になっているようでした。

両日ともに、大阪産業大学野球部員の皆さんのコミュニケーション力の高さがものすごく素晴らしいと感じました。両日メンバーは違えども高校生にしろ、小学生にしろ、瞬時に打ち解けて交流をしてくださっていました。本当に素晴らしいかったです。これは宮崎先生が日々学生に対してのご指導とチームの雰囲気、チームの文化なのだろうと感じました。大感謝です。

「個人的な想い」

石巻は個人的に所縁のある地でした。親友、友人、知人など多くの方々が住まわれています。石

巻のみならず、特に宮城県内、気仙沼、仙台、名取、岩手陸前高田、幸いにも直接亡くなるなどはありませんでしたが、被災はされました。一番大きな被災を受けたのが、石巻の親友でした。その親友の住まいの校区、震災当時の避難先が奇しくも今回お世話になった鹿妻小学校でした。本当に偶然ですが、第一回目の雄勝町に参加させていただいた時に第二回目以降の活動拠点として調整されたのが鹿妻小学校でした。縁を感じます。

親友の家族は、自宅にご両親、次男、長男は高校のグラウンドで野球の練習中、奥様は職場、本人も内陸の職場、長女は友達と遊んでいてと、家族バラバラな状態だったそうです。本人は職場のテレビでヘリからの名取市近辺・仙台空港あたりの津波の映像を見て、あわてて自宅に戻ろうとしたそうでした。というのは、名取市あたりよりも石巻の方が先に津波が来る事を知っているからでした。自宅に戻ろうにも通信手段も断絶、石巻近くで車は水没、車を乗り捨て、胸まで水につかりながら、その日は自分ひとり校区とは別の中学校で一晩を過ごしたそうです。もちろん家族の安否はわからない状態です。次の日、早朝から自宅に歩いて向かい、トンネルを出た瞬間の光景に絶句したとことでした。“なんだ、これは！”車はひっくり返り、いたるところに遺体がありと、どうなってしまうんだ、と感じたそうです。

避難所の鹿妻小学校でご両親と次男と再会をします。ご両親と次男は玄関を出た瞬間に津波に流されたそうです。父親は木に掴まり数時間浮いていて助かり、母親と次男は津波に流されながらちよど人のいる方向に流され、運良く引つ張りあげてもらい、一晩ベランダで過ごしたそうです。あぶ濡れで、雪の降る中、そして真つ暗な中、しかし、市の中心沿岸部、門脇、日和山辺りは大きな火災となり、空は赤く、サイレンだけが鳴っているという、恐ろしい状況だったそうです。今私には想像することが出来ません。

結局家族全員が再会できたのは三日後だったそうです。鹿妻小学校で家族全員が再会できた時の喜びは言葉には出来ないほどの喜びだったそうです。その場では喜ぶ事が出来なかったのですが、すぐ近くに誰がいない、彼がいない、と家族の安否がわからない人ばかりだったからだそうです。

津波に流された中学二年生（当時一年生）の次男は、しばらくは夜中にうなされたり、暴れたりする事がたびたびあったとの事でした。心に傷を負っているんだなあと感じました。

石巻工業高校野球部の監督さんからも多くのお話を伺いました。その中で衝撃的だったのが、気仙沼光洋高校のお話しでした。地震の時、野球部員はグラウンドで練習中、生徒も先生方に多くい

らっしゃったそうです。上の階へ上の階へ逃げ、最後は屋上に逃げられたそうです。津波の第一波、第二波、第三波推移がどンドン上がり、次の波が着たら屋上の自分たちもさらわれると感じ、覚悟をして生徒たちはみんな手を繋いで祈ったそうです。先生方は最後の衣服を、今までタバコを吸ったことのない先生までが吸われたそうです。本当に追い込まれた極限の状態だったことがわかりました。その後津波で屋上がさらわれることはなかったそうですが、もちろん一晩、救助が来るまで屋上で過ごしたそうです。その間に多くの流されているものを見ていることはいまでもないのですが、現地で何うお話しは、本当に衝撃的なことばかりでした。

「最後に」

今回の学ぶ会において、鹿妻小学校を訪ねることができ、そして、個人的な友人たちに会うこともでき、本当に一人別な幸せをいただきました。本当に感謝しかありません。

大川小学校に参ったことはもちろん胸の痛むことでした。修養団の方々、山崎さんにお会いしたことも導かれていと感じました。大川小学校のみならず、本当に広範囲において命が失われたこと肝に銘じた今回の学ぶ会でした。

震災から半年が過ぎ、街中や生活は戻りつつあるでしょうが、復興にはまだまだ細く長い支援が

必要であることを忘れずに、大阪の地で日々生活していききたいと思えます。ありがとうございます。